

された出土状態であったからである（鹿県埋セ2000）。

その後、同様な埋納或は埋設された壺形土器が、同県福山町城ヶ尾遺跡や熊本県深田村灰塚遺跡等からも発見されてきた。さらには、宮崎県野尻町漆野原遺跡などでは全く損傷のない完形の壺形土器も発見されており、これらも埋納或は埋設された壺の可能性を伺わせるものであることにも注目した。

今回、これまで壺形土器の出土した遺跡の中から埋納或は埋設された状態で出土した3遺跡を中心に、壺形土器の機能や用途について言及し、南九州縄文時代早期の社会的背景について検討してみたい。なお、壺形土器については、その系譜や器形の変遷など多くの細かな問題点も所在するが、これらについては稿をあらためて言及したい。

2 壺形土器の出土遺跡と分布範囲

壺形土器の出土遺跡は、1991年の集成時では11遺跡であったが、今回の集成では38遺跡を数え、わずか10余年の間に大幅に増加している。

これらの分布域は、鹿児島県（21遺跡）を中心に熊本県南部（5遺跡）から宮崎県南部（11遺跡）を含んだいわゆる南九州と、長崎県（1遺跡）がある。圧倒的に鹿児島県が多いが、南九州縁辺部の長崎県でも同系統の壺形土器が出土しており、今後、北部九州や宮崎県北部から東九州への拡がりも充分考えられる。

（1）鹿児島県の出土例

鹿児島県の壺形土器の分布は、県本土の手向山式土器や平椀式土器、塞ノ神式土器の出土遺跡のほぼ全域に分布する。注目すべきは、熊毛諸島の種子島にも存在し、分布圏が離島へも広がることである。

中尾田遺跡では、早期の手向山式土器を中心に10類25細別の土器群が出土しているが、そのうち手向山式土器は第9類に該当する。

壺形土器は第8類に分類したもので、第9類の手向山式土器とは区分している。それは、網目燃糸文を施文する土器群のなかの壺形を呈するものを第8類とし、手向山式土器の器形を呈するものを第9類として区分したためである。つまり報告書の当時の見解では「第8類土器は、壺型の器形を呈する特徴的な形態をもつものである。ほぼ1個体の出土であって、これまで類例は知られていないものであり、非常に個性的な土器といえる。」として、手向山式土器の文様は所持するものの、形態上、手向山式土器とは区分して類別した。器形は、頸部で締め、口縁部は外反する。なお、この壺形土器の同一個体片は、ほぼ20×30mの広い範囲に約20点出土している（鹿県教委1981）。

塚ノ越遺跡では、トレンチ調査（確認調査）の32トレンチで前平式土器や吉田式土器などの早期前葉の土器も若干混在するが、そのほとんどは早期終末の椀ノ原式土器（塞ノ神A式土器）が出土している。その中に、該当の壺形

鹿児島県壺形土器出土地名表

	遺跡名	所在地	文献
1	石峰	始良郡溝辺町麓	1
2	中尾田	始良郡横川町中ノ	2
3	星塚	始良郡横川町下ノ	3
4	前畑	鹿屋市郷之原町前畑	4
5	飯盛ヶ丘	鹿屋市郷之原町飯盛ヶ丘	5
6	榎崎B	鹿屋市上野町榎崎	6
7	別府（石踊）	曾於郡志布志町安楽	7
8	下田	曾於郡志布志町帖	8
9	平椀	国分市上井	9
10	上野原2・3	国分市川内	12
11	上野原10	国分市川内	10・11
12	城ヶ尾	始良郡福山町佳例川	13
13	横井・竹ノ山	鹿児島市犬迫町横井・竹ノ山	14
14	石坂上	川辺郡知覧町永里	15
15	塚ノ越	日置郡吹上町入来	16
16	小市原	薩摩郡種脇町塔之原	17
17	出水平	曾於郡大隅町月野	18
18	七ツ谷	始良郡吉松町永山	19
19	石打	始良郡吉松町永山	19
20	香ノ田	曾於郡松山町新橋	20
21	須行園	熊毛郡中種子町野間	21

宮崎県壺形土器出土地名表

	遺跡名	所在地	文献
22	天神河内第2	宮崎郡田野町天神河内	22
23	白ヶ野第3	宮崎市大字船引	23・24
24	杉木原	宮崎郡清武町大字今泉	25
25	妙見	えびの市大字東川北	26
26	下藪	都城市荒ヶ田下藪	27・28
27	開尾	串間市大字奈留	29
28	札ノ元	宮崎郡田野町甲前平	30
29	元野河内	宮崎郡田野町甲元野	31
30	東城原第2	西諸郡郡野尻町紙屋	32
31	橋山第1	西諸郡郡高岡町橋山	33
32	漆野原	西諸郡郡野尻町紙屋	34

熊本県壺形土器出土地名表

	遺跡名	所在地	文献
33	合戦ノ峰	球磨郡山江村山田	35
34	高城	球磨郡山江村山田	35
35	城・馬場	球磨郡山江村山田	36
36	天道ヶ尾	人吉市七地町天道ヶ尾	37
37	灰塚	球磨郡深田村字灰塚	38

長崎県壺形土器出土地名表

	遺跡名	所在地	文献
38	百花台	南高来郡国見町百花台	39

土器が出土している。

壺形土器は、口縁部破片のみの出土で個体数は少ないが、口縁部の形態からa～dの4つに分けられている。a類の口縁部は、胴・肩部から内傾したままでおさめる器形で、口唇部は若干外反して拡張した傾向がみられる。口唇部外端には刻目を施し、それ以下の口縁部～肩部には刻目を有する微隆起突帯文を、数条を単位として螺旋状に巡らせている。胴部下半の文様は、明らかでない。b類は、同様に内傾する口縁部であるが、口縁端部は意識して外反するものである。しかし、器形状はa類とほぼ同じである。口縁外